

「原爆文学」再読9——原民喜『夏の花』報告

中野和典

この小特集では二〇二二年一月四日(日)にオンライン形式で行った「原爆文学」再読9——原民喜『夏の花』について報告する。当日は発題者の中野和典が『夏の花』はどのように読まれてきたか?』と題して『夏の花』の受容史を整理し、続いてもう一人の発題者の遠田憲成が「原民喜『夏の花』の作品名について——「氷花」との比較から——」と題して短篇「夏の花」と「氷花」の比較から見えてくる問題について報告した上で、参加者全員で討議を行った。この小特集には二人の発題者の報告を当日の発言順に掲載するので、それぞれの詳細についてはそれぞれをご覧ください。ここでは全体討議の内容を紹介する。

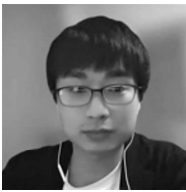
まず話題になったのは原民喜とエドガー・アラン・ポーとの関係についてであった。短篇「夏の花」には〈不思議なのは、この郷里全体が、やはらかい自然の調子を喪つて、何か残酷な無機物の集合のやうに感じられることであつた。私は庭に面した座敷に這入つて行きたびに、「アツシヤ家の崩壊」といふ言葉がひとりでに浮んでゐた。〉と記されているが、語るべきでないとい



発題 中野 和典

う語り方、被爆者を連想させる兄妹の描写、挿入される詩のリズム、光と嵐に包まれた館の崩壊など「アツシヤ家の崩壊」と「夏の花」には細かな表現に至るまで共通性が認められるのではないか、という意見が出された。これについてはポー

研究の中でこれに近い指摘がされているという応答があつた^①。また「夏の花」とポーの墓場詩やロマン派との関係についてもさらに追究すべき点が多いのではないかという発言もあつた^②。



発題 遠田 憲成

次に話題になったのは「氷花」などに描かれる〈新しい人間〉についてであつた^③。「新しい人間」とは抽象的な表現だが、エコクリティシズムのポストヒューマンに重なるものなのではないか、あるいはカレル・チャペックの『ロボット』に描かれる新しい人間に重なるものなのではないか、あるいは生

存欲求にしたがって生きる戦後の人間だったのではないか、あるいはマルキシズムのように階級や国籍を越えて平等につながる人間だったのではないか、とさまざまな解釈が示された。いずれにしても「氷花」を発表した一九四七年頃の原民喜は〈新しい人間〉に希望を持っていたが、結局新たな人間としての像を結ばなかったようであるという発言もあった。

次に話題になったのは「夏の花」のイメージについてであった。夏の花という言葉からは広島で墓に供えられる盆ぼんどうろう燈籠なども連想されるが、この言葉はそういった習俗のイメージにもつながっているのではないか、という意見が出された。これについては「永遠のみどり」に〈寺の近くの花屋で金盞花の花を買ふと、亡妻の墓を訪ね〉とあることから⁶⁾〈あるいは昭和二〇年八月四日の墓参の花もこの黄色い金盞花ではなかったろうか〉とも推測されているが、「夏の花」の冒頭部には〈その花は何といふ名称なのか知らないが、黄色の小弁の可憐な野趣を帯び、いかにも夏の花らしくつた〉と曖昧に記されており、それぞれの読者が思い浮かべる供養の形が投影できるように描かれているのではないかという応答があった。

次に話題になったのは原民喜と前衛芸術との関係についてであった。「夏の花」の末尾における「私」からNへの突然の視点の変化やまるで途中で終わっているかのような小説の結び方には前衛劇の影響があるのではないかと意見が出された。また原民喜は創作の初期にダダイズムに傾倒しており、その傾向の俳句も作っているが、俳句がスケッチあるいはエッセンスとなつて後の散文作品が生まれているのではないかという意見もあった⁶⁾。「夏

の花」に挿入された詩はエズラ・パウンドのいうイマジズムに近い手法で書かれているのではないかという発言もあった。また「夏の花」で〈さつと転覆して焼けてしまったらしい電車や、巨大な胴を投出して転倒してゐる馬を見ると、どうも、超現実派の画の世界ではないかと思へるのである〉というときの〈超現実派の画〉が何を想定しているのかはつきりしないが、たとえば光の閃光の作品なども考えられるのではないかと発言もあった。

次に話題になったのは腕時計についてであった。原民喜の「原爆被災時のノート」は〈今本八女房ノ死体ヲ探スノニ 何百人ノ女ノ打伏セニナレルヲ起シテ首実檢ヲシタガ腕時計ヲシテキル女ハ一人モナカツタト云フ〉と結ばれており、これが「夏の花」のNの話や「廢墟から」の〈行衛不明の妻を探すために数百人の女の死体を抱き起して首実検してみたところ、どの女も一人として腕時計をしてゐなかつた〉という記述のもとになっていると考えられるが、これは敗戦間際の女性が腕時計を身につけられないような状況にあつたということなのか、誰かが遺体から腕時計を外していったということなのか、どのように解釈すればよいのか分からないう意見が出された。これに対しては被爆による遺体の損傷が激しくて妻が身につけていた腕時計を目印にして探すしかなかつたということではないか、あるいは遺体が残っている中で矛盾するが原爆による熱が腕時計も溶かすほどのものであつたという強調表現なのではないか、という意見もあった。また時代は下がるが岡本陣の〈つばくらや嫁してよりせぬ腕時計〉(一九七六)という句が示す通り、腕時計は装飾ではなく、持ち主がいわゆる職業婦人であることを指示する記号コードになつており、探してい

る妻が専業主婦ではなかったことを表しているのではないかという発言もあった。

最後に話題になったのは引用についてであった。ほとんど他人の発言を引用せずに「夏の花」を書いた原民喜とは対照的に、新聞記事や科学者の発言などを多く引用して「屍の街」を書いた大田洋子は後に「私は作家が客観的のものを書かなくてはならぬということに、ある疑問を抱く日もあった」と言い、「いずれの日か私は、不完全な私の手記を償うべく、かならず小説作品を書きたいと思っている」と語っている⁶⁰。大田洋子のようにさまざまに人間の発言を引用して多声的に書くことによる可能性もあるが、原民喜のように引用せず主観的に書くことによる可能性もあるのではないかという発言があった。また「夏の花」を原民喜の想念によって統括された小説とする見方があるが、その想念とは何なのか、想念で統括できないことを表すことが一つの想念であるという見方もできるのではないかという発言もあった。

発表から七〇年以上読み継がれてきた原民喜『夏の花』をめぐる議論は多岐にわたり、予定された時間には収まらなかった。今回の再読が『夏の花』を新たに読み継ぐ一助となることを願っている。

注

1 伊藤詔子「アルンハイムの領地」と「人生の航路」―ポーとトマス・コール」(『ディズマル・スワンプのアメリカン・ルネサンス ポーとダークキャンオン』音羽書房鶴見書店、二〇一七・三)は「アツシヤ家の崩壊」の語り手が「館の姿を一目見るなり」それを「凶兆のメ

ランコリーの風景」と見て取ることに「夏の花」の語り手が「楓の異様な「無機質」への変貌」を「原爆という大破壊の凶兆」と見て取ることに共通する感覚があることを指摘し、その感覚とは「人間を世界の中心に置くヒューマニズムから環境決定論的ポストヒューマニズムに変容する際の、精神の危機的な状況認識」であると論じている。

2 「新しい人間」は原民喜のテキストにおいて「新しい人間が見た」といふ熱望は彼にもあった(『氷花』(文学会議「一九四七・二」)、『新しい人間が生れつつある、それを見るのはたのしいことだ』(『東京の友人、長光太からそんな便りをもらうと、矢も盾もたまらず無理矢理に私は東京へ出てまいりました。』『新しい人間』を求めようとする気持は今もひきつづいでいるのですが、それにしても、今ではその気持が少し複雑になつています。何といたつても、敗戦直後は人間の悲惨さえ珍しく、それにはそれにつづく漠たる期待もありました。三年を経た今日では人間の生存し得るぎりぎりの限界にまで私は(生活力のない私は)追いつめられています。この手紙を書きながらも、ふと空襲警報下にあるような錯覚と気の滅入りを感じるのもそのためなのでしょう。)(『二つの手紙』(月刊中国「一九四八・二」)、「たしかに私は死の叫喚と混乱のなかから、新しい人間への祈願に燃えた。薄弱なこの私が物凄い饑餓と窮乏に堪へ得たのも、一つにはこのためであつたらう。だが、戦後の狂瀾怒濤は轟々とこの身に打寄せ、今にも私を粉砕しようとする。)(『死と愛と孤独』(『群像』一九四九・四)といった形で記されている。

3 原民喜「永遠のみどり」(『三田文学』一九五一・七)。

4 江種満子「夏の花」(原民喜)(『国文学 解釈と鑑賞』一九八五・

八)。

5 樫本由貴「原爆作家」原民喜の俳句創作」(『社会文学』二〇二二・八)は〈伝達性の強い〈水をのみ死にゆく少女蟬の声〉と、伝達性の弱い〈吹雪あり我に幻のちまたあり〉の二句の関係は、記録性を評価された「夏の花」と、「メッセージ性」の「脱構築を誘発する」と評価された「鎮魂歌」との関係に類似している〉ことなどを指摘した上で、〈原にとつて俳句創作は戦前戦後を問わず創作のための試金石であつた〉と論じている。

6 大田洋子「序」(『屍の街』冬芽書房、一九五〇・五)。大田洋子は『夏の花』について〈原子爆弾を素材とした感覚的な作品で、その傾向に必ずしも感服しない〉(『死の魔手』(『婦人公論』一九五一・五)と)しながらも〈夏の花〉をよむ場合、てつきり私は作品の芸術性を追いかけているのである〉(『文学のおそろしさ』(『新潮』一九五六・三))とも語っている。